



写真5：澤崎賢一《よしことしゃんらんがわたし》ラムダプリント、20.3×25.4cm、2012年



写真上：李香蘭本人の写真

他者への同化

個展「さかいにはさま、る しんこうけい」
GALLERY TERRA TOKYO, 東京, 2012年

積極的な「主体性の消失」の後に僕が試みたのは、「他者への同化」であった。その代表的な作品として、2012年にGALLERY TERRA TOKYO(東京)で開催された個展「さかいにはさま、る しんこうけい」で発表された映像作品《よしことしゃんらんがわたし¹⁰⁾》(写真5-10)と《ときのきせき¹¹⁾》(写真11-13)の2つがある。作品テーマは亡くなった僕の祖父・正恵(1918-2010)が残した戦争体験にまつわる日記により起因する。当事者としては体験しえない正恵の戦争体験を、正恵と同化、或いは時代の空気とともに彼の体験をトレースすることで、僕自身が自分の祖父の戦争経験を追体験しようと試みた作品である。

この作品制作の動機は、2011年に発生した東日本大震災にあった。当時、僕は京都に在住していて、大阪の会社に勤務していた際に震災が発生した。このとき、当事者として震災に関わることをできない中、いったい何ができるのか、と考えていたときに僕は正恵の日記と再会した。非当事者として現実的にできることは、おそらく寄付だとかボランティアだとか、そういう活動になると考えられる。しかしこのときの僕の問いは、出来事から一定の距離感があるからこそ、芸術的实践として為すべきことがあるのではないか、ということであった。

実は、正恵の日記に「再会」という言い方をしたのは理由がある。正恵は、僕が幼少期の頃から実家の広島に帰省するたびに、戦争体験や彼の半生について綴った彼自身の編集による冊子を家族全員に配り続けていた。しかし僕は、震災のときまでそのことを半ば忘れかけていた。何か、これまで経験したことのないかたちで時代が変化しようとしていた。いまこそ、正恵が我々に伝えようとしたことと向き合うときなのではないか。これがこのときの作品制作の直接的な動機で、小さな個人史を出発点としたものではあったが、僕にとっては芸術的实践の存在意義が賭けられていた。

映像作品《よしことしゃんらんがわたし》は、正恵と同時代を生きた女優・李香蘭(1920-2014)に特殊メイクによって扮した僕が彼女の代表曲の1つ《蘇州夜曲¹²⁾》を歌うプロモーション・ビデオ(PV)に見立てた映像と、李香蘭と僕自身のはざまの姿(メイクはせず、チャイナドレスを着ているのみ)で祖父が生前に暮らしていた広島へと京都から旅する記録映像、この2つで構成されるマルチスクリーンの映像作品である(写真7~10)。広島への旅の道中には、正恵が亡くなった戦友へ贈った「ユネスコ憲章前文」の朗読を各所で行った。